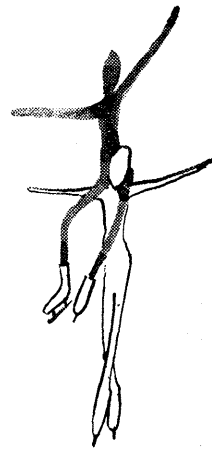


私の幼児教育論

——くつ下は誰でもはけるか——



村瀬 隼男

山本五十六海軍大將は、知人への手紙に、当時の学徒兵の父としての気持ちを、「近頃の若い者は、などと申すまじく候」と托しました。近頃の山口大学の学生は、それでも申しております。

「近頃の先輩はダメ、挨拶一つできやしないのだから」。たしかに近頃の若者は、風呂敷も満尾に結べない上に、エチケットと来たら問題だらけです。「目上」の前をつつ切ったりするのは平気のように見えます。

だからと言って、近頃の若いモンは本当に駄目なのでしょうか。私にはそうは思えません。

先週は津守先生にもお越し頂いて、私共の園も研究発表大会をもつことができましたが、そのあとで、或る新聞社がやって来て、色々話はずんだのはよいとして、結局は、当面する教育上の諸問題の根源を、現在の幼児教育に認めると云わせたいらしいのです。私はそうは思わない、とこたえるよりもさきに不思議なのです。なぜこんな論法がまかり通るのか、がです。

この論法は「時間」の軸で変なのです。ひとは発達してイマが

ある、という当り前のことが忘れられているか、そうでなければ、幼児教育それ自体の発達の事実と可能性が無視されているか、とに角変なのです。

アメリカでは、責任を回避することを「一ドル札を次に手渡す」と表現しますが、大学から高校、中学校、小学校と手渡されて来たお札を、最後にホイと渡されて、さて次を見廻しても持って行き場がなくてオロオロしている、人の好いオニを見る気分です。

今までの話は、自己紹介も込めながら、私はそうは思わない話をあげたのですが、それならどう思うのかと問われても困ってしまいます。気分で言っただけのなら、お札を小学校から大学にまで、つき返してやりたいのです。もともとと教育という名の、同じ仕事をしている商売仲間の筈ですから、「現代教育の諸問題」などと聞き直るから、お互い判らないままお札の廻し合いが始まるので、もっとももっと小さくて、お互いこれなら手が届くという見通しも得られる程の確かで身近な共通問題の領域でなら、これは出来ると思います。そしてその為の技法のうちで一番効果的なものとして、「この子はもう○○○だから」という考えを棄ててみる

ことがあると思います。○○○は幼稚園、小学生、高校三年生とか、年長さんとか大学生とか、です。

私の大学の講義の話を例にひかせて下さい。時間が来て教室に入って行った時、黒板一杯に前の時間の消し残りがあつたときは厭なものです。自分で消していると、益々どうでもよくなります。「こいつら、ポケーと待っている間に、これに気附かぬとは……この高遠な講義も泣くぜ……」などと心中悪態をつきながらの、時間にすれば三十秒かも知れませんが、その日のプランはどこかへとんで、第一、士氣も失われて、「その場に見合った」講義に終始する結果になります。

部屋に戻って来て、コーヒーを飲んでいると学生が相談に来たりします。一杯ついでやって、呑んでそのまま立去る者も時いるのが現状です。夢の大学には遠く、秘書も手伝いもいるわけじゃなし、自分で洗うはめになります。あーア、何てこった。こいつら相手に真善美の探求とやらをせにゃならんのか、とつぶやぐ度に、「その場に見合った風に」周囲を定義づけることになりました。

カニは己が甲らに合わせて穴を掘るといいますが、「その場に

見合つて」ばかり動いていたのでは向上もあり得ません。私は誰と相談する訳にいかず、自分でこの問題を解決せねばなりませんでした。そのために、「近頃の若い者は、凶体は立派になったが、中味はスッポンボンなのだ」という作業仮説を立てました。

まず、「もう大学生だから、これ位は判つてゐる筈だ」などとは決して思わないことです。黒板は、誰か気附いた者が、消しておくべきであることを、臆面もなく、壇上から申します。そして、誰かがきれいにしておいてくれれば、元來が教師はお人好しなのであるから、益々気分をよくして、当人の一二〇%を出して講義するものであるから、授業料の面でも得になるものであることを附加します。更にこれが、各人の生活環境を質的にもり上げ、より高次の自己実現につながる第一歩であることをつけ足します。「三尺退つて師の影を踏まず」は決して古風な思想どころか、そうした合理精神への洞察からなる極めて功利的、近代的な表現であることまでを忘れません。そして講義が終つて、自分できれいに消して退室することも忘れません。

結果——賢者へは一言で足りる。学期初めの五分間は、その後の一年間申し分ない気分を約束してくれるものです。

コーヒーカーップのケースも全く同じです。この人達（このいつら）はも早や出なくなっています）は、今迄ここ数年來、受験王

子様や勉強王女様だったので、コーヒーはだまつて飲むだけのものだつたのだ、と解釈します。洗う練習の場がなかっただけだ。洗つて帰れというのは恥をかかせることになる、と考える方が將來に亘つて不親切なことになる。このまま社会に出したとしよう。出されたコーヒーの後始末をせねばならぬ場合もあることを体験せぬ者に、社会の風はモロに冷く当るかも知れない。その上、本人はどうして自分が周囲とシツクリいかないのかさえ洞察できずに、周囲の風の冷たさばかりをかこつすべしかなくなるかも知れない。

と、まあこう考えて来ますと、こちらが先輩として、教師として、何かが気になつた時点で即刻、「おい、コップ位洗つて帰れよ」という情報伝達行為をやることの方が、ずっと親切で教育的だ、となるのです。だめだな、話にもならん、とお互いが嘆じ合つていたのでは、なるべき改善もありません。一ドル札の渡し合いのうちに、お互いのイライラからは解放されますまい。

はじめの基盤のない処に、途中からだけの「訓育」を課したのでは、極めてしばしば失敗が伴うことは充分に皆が判つてゐるつもりでも、実情は案外甘いようです。

私の友人に、肢体不自由の子ども達に、くつ下のはかせ方から訓練して、はじめの基盤の構築の確認をしようとしている男がい

ます。ソックスを、最初は手伝って、くるぶしの上まではかせておいて、「さあ、くつ下をはきましょーう」とはげますのです。「さあ、ここから伸ばしてごらん」ではないのです。臆面もなく、くつ下をはけるようになりたいと一緒にねがうのです。不自由な手足で、何とかスネの辺までゴムの部分が歪まず伸びるまで、何回でも気長に練習の機会を与えます。できたときには、「ヤア、できたできた！ 上手にはけたね！」と、ここでも臆面もなくほめるのです。

その「単元」が終了すると、次は、もう一段さきの、土ふまずの処まではかせておいて、そこからはカカト越えの練習です。それができて次はつま先から、そして次の単元は、たくったものを手持たせてやることから、そして最終単元は、そこに置いてあるくつ下を自らとってはく、というプログラミングが組まれています。

くつ下が自分ではけるようになった子ども達の喜びと、自我像の変革は、想像を超えたものがあるそうです。

くつ下くらい誰でもはける——この思想が、教育における、元来あり得べからざる「落ちこぼれ」などの珍語の根底にあります。この子はまだ年長組だから左右の概念はでき上っている筈、とか、高二ならもう因数分解できる筈、とかでなく、私達は、た

えず、この子にはどこから与えるべきかを認識することから始めることこそ、幼児教育をその一環とする、教育という私共のいなみの原点であると考ええるものです。

(山口大学教育学部 同附属幼稚園長)

